The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	災害復興のパラダイスロストとパラダイムリゲインド：尊厳ある縮退と「つなぐ」かかわり
Author(s)	宮本, 匠
Citation	災害と共生. 2020, 4(1), p. 21-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

災害復興のパラダイムロストとパラダイムリゲインド
—尊厳ある縮退と「つなぐ」かかわり—

Paradigm Lost and Paradigm Regained in Disaster Recovery
-Shrinking Strategy with Dignity and a "Tsunagu" approach-

宮本匠[1]
Takumi Miyamoto

要旨
人口減少社会の災害復興は新しいパラダイムを必要としているが、パラダイムシフトにあたり、まずはパラダイムが失われている状態、パラダイムロストにある社会が特徴的にもつ問題を分析することが、パラダイムの再獲得であるパラダイムリゲインドのために重要だ。パラダイムロストにある社会では、集合的否認が生じ、それが社会を加速度的に破綻させる可能性がある。集合的否認が生じるのは、現在の意味が未来へと疎外されるインストゥルメンタルな時間感覚が原因である。その克服には、〈待つ〉ということの再考から引き出される、被災者の少し先の未来と今をつなぐような「つなぐかかわり」によって、コンサマトリーな時の充実を回復することが重要だ。

Abstract
A shrinking society which attempts to "Paradigm shift" may experience problems that might be termed "Paradigm lost". If society is to achieve "Paradigm regained", we must solve these problems. The problems are described as "Collective denial" which means people tend to deny the reality that society is shrinking. "Collective denial" poses the risk that the speed of decline may accelerate leading to the demise of society. "Collective denial" is due to the instrumentalism of time which evaluates the present from the perspective of the future. In order to conquer "Collective denial" and accomplish "Paradigm regained", it is important to recover a consummatory sense of time, which enables evaluation of the existence within the context of instrumentalism, by connecting the "near future" to the present with a "*tsunagu*" approach that is available by rethinking the concept of "waiting".

キーワード: 人口減少、災害復興、集合的否認、パラダイム、待つ
Keywords: depopulation, disaster recovery, collective denial, paradigm, waiting

１．はじめに

人口減少社会の災害復興は、新しいパラダイムを必要としている。右肩上がりの時代の災害復興のパラダイムから、右肩下がりの時代の災害復興のパラダイムへと、パラダイムシフトが求められている。例えば、矢守（印刷中）は、「「世直しvs. 立て直し」から「やり直し」」へと、「Build Back Better（BBB：拡張・発展的復興）からSave Sound Shrink（SSS：縮小・楽着的復興）」へと、２つのパラダイムシフトの可能性について論じている。前者のパラダイムシフトでは、災害前のパラダイムを基調として修正を図るような「立て直し」と、災害前のパラダイムの抜本的見直しを図る「世直し」の2項対立の中で欠落している被災者の視点を賦活するものとして、被災者が災害前の何気ない日常を思い出せるような疑似的な「やり直し」の可能性が述べられている。後者においては、「よりよい状態」をめざすBuild Back Betterに代表されるような、まさに右肩上がりの時代のパラダイムから、個人の暮らしや集落、社会が小さくなること、消えていくことを否定的に見るのではなく、そこに幸福や満足を見出すようなSave Sound Shrinkの可能性が論じられている。このように、これまでと大きく社会情勢が変化していく中で、どのようなパラダイムに基づいて社会を構想するのかについて議論を重ねていくことが、災害復興の理論と実践を豊かにすることは間違いない。矢守（投稿中）が試みているように、社会が縮小していくことに悲劇だけを見るのではなく、そこに新しい社会の希望を見出すような、「尊厳ある縮退」のための議論が必要だ。本論も、この議論の系譜に連なること

[1] 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科　准教授　博士（人間科学）
Associate Professor, Graduate School of Disaster Resilience and Governance, University of Hyogo, Ph.D

を意図している。

ただし、このパラダイムシフトを可能にするためには、パラダイムシフトのプロセスをもう少し子細に見つめてみることも必要ではないだろうか。なぜなら、パラダイムシフトが求められるような社会、つまり既存のパラダイムが失調をきたしている社会が特徴的に抱える課題や傾向というものも存在するように思われるからである。言い換えれば、パラダイムシフトの手前にある、パラダイムロストの状態を分析することが、パラダイムシフトへと、つまりパラダイムの再獲得であるパラダイムリゲインドの実現に重要であると考えるのである。

パラダイムロストの問題を考える必要があるのは、パラダイムロストにある社会に、客観的により望ましいパラダイムが与えられたとして、それが容易に受け入れられるとは限らないからだ。パラダイムロストには、ただパラダイムが失われていること以上の「効果」がある。この「効果」を乗り越えなければ、どれだけ優れた新しいパラダイムも受容されることはないだろう。そこで、本論文では、まずはパラダイムロストにある社会が特徴的に抱える問題について検討し、それがどのようにパラダイムシフトを阻んでいるのかを考察する。その上で、パラダイムリゲインドに至る方策について、理論的な考察と実践的な提案を試みたい。

２．「復興とは何か」とは何か

パラダイムロストがもたらす問題を考える端緒として、まずは、近年の災害復興の原理的な問いである「復興とは何か」という問いをふりかえってみたい。この問いが生まれたのは、2004年の新潟県中越地震（以下、中越地震）であった。なぜ「復興とは何か」と問われたのか。それは、まずもって中越地震の被災地が、震災以前から過疎高齢化の進む中山間地域であり、「復興」することが端的にイメージできなかったからである。通常、旧に復する「復旧」に対して、「復興」には、元に戻すだけでなく「より良い状態」を達成するという含意がある。ところが、災害前から進んでいた過疎化が災害によって一気に加速した中越地震の被災地では、「よりよい状態」としての未来を想定することなど到底不可能であった。そのような被災地に「復興」はあり得るのか。「復興とは何か」という問いは、このような背景をもって生まれた。

では、「よりよい状態」を想定することが困難な時代に「復興」はあり得ないのだろうか。いや、そんなはずはないと、中越地震の被災地は考えた。そもそも人口の増減や経済規模だけで人間の豊かさを評価する、この見方自体に問題があるのではないか。実際に、中越地震の被災地でみられた豊かさには、それらの範疇にはおさまらない、より根源的な生の充溢というものがあった。厳しい自然に工夫をこらしてそれを恵みとしても享受し、人間と人間が支えあいながら、楽しみあって過ごすような暮らしがあった。だから中越地震からの復興では、災害による被害からの回復だけではなくて、現代社会の表面的な豊かさの下に隠れている、自分たちの足元の価値を見直すことも大切ではないかと考えられた。

だから、中越の被災地から生まれたキーフレーズは「問い直し」だった（稲垣, 2016）。人間にとっての豊かさとは何かを問い直し、人口減少を受け入れながらも豊かだと言える暮らしを模索することが、中越の復興なのではないかと考えられたのだ。たとえ人口が半減しても、集落に住む人がいなくなったとしても「復興した」と言えるのだとしたら、それはどのようなことなのかが、「復興とは何か」という問いの背景にあったのである。そして、それは中越にとどまらず、成長社会から成熟社会（あるいは縮小社会）へと移行する日本社会全体にとっても重要な共通課題なのではないかと考えられた。だからこそ、この問いは、中越というローカルな現場に閉じることなく広く共鳴して、日本災害復興学会の設立へと結実したのである。

このように、新潟県中越地震で投げかけられた「復興とは何か」という問いの背景をふりかえってみると、まず「よりよい」という考え方からの脱却があり、次に「よりよい」が前提としていた価値観自体の再考が促されていたことがわかる。まさに、右肩上がりの時代のパラダイムの再考と、右肩下がりの時代の復興のパラダイムの再構築が模索されていたと言える。ところが、近年、このような議論のトレンドの逆を行くような、動きもみられる。その象徴が、2015 年 3 月の第 3 回国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組 2015 - 2030」の 4 つの優先行動のひとつとしてあらためて謳われた「Build Back Better」である。仙台防災枠組以降、「Build Back Better」は再び盛んに聞かれるようになってきたし、素朴に受容されるようになってきたようにも見える

（e.g., 矢守, 印刷中 ; 近藤・宮本・石原・木戸・李・宮前・大門・立部, 2020）。「Build Back Better」とは、「災害の発生後の復興段階において、次の災害発生に備えて、より災害に対して強靭な地域づくりを行うという考え方」（内閣府, 2015）である。災害後の復興過程において、二度と同じ被害を繰り返さないように、より安全な社会を再建しようということだ。もちろん、この考え方自体に全く非はない。問題は、矢守（印刷中）も指摘するように、そもそもより安全な社会どころか、元通りに復旧することすら難しい社会において、それをどのように実現できるのかだ。右肩下がりの時代においても、被災前より安全な社会をめざすことは大切だ。しかし、それは未来の縮小トレンドを見極めながら、限られた資源をどのように効果的に用いるのかが問われるものになるだろう。それは、すべてを復旧することが難しいかもしれないという条件の中で、それでも大切にしていきたいものは何かをあらためて考え、問い直す作業になるはずだ。つまり、右肩下がりの時代の災害復興にとって、「Build Back Better」は、無条件の目標なのではなく、何を再建するのか（Build）、いかなる原点に着地するのか（Back）、どのような価値を新たなパラダイムとして据えるのか（Better）、というそれぞれの視点から問い返されるものだ。

しかし、「Build Back Better」には、「より安全な社会」という否定しがたい金科玉条がある。この否定しがたいメッセージを隠れ蓑として、「Build Back Better」に「国土強靭化」がセットとなり、未来の適正規模や右肩下がりの時代の豊かさについての再考を踏まえないような復興や防災の取り組みがなされているとはいえないだろうか。日本の減災復興が潜在的に忍ばせてきた開発的性格が、耳なじみのいい「Build Back Better」という言葉を通して復活しようとしているのではないだろうか。

いやいや、そうではない、日本社会のように防災インフラがある程度整った社会もあるが、世界にはまだまだ日本のような水準には程遠い社会もあるのだ、だから「Build Back Better」も未だ有効な考え方だし、そこで日本が果たせる役割もあるのだ、という見方もあるかもしれない。それは部分的には正しいだろう。しかし、だからといって、まさに「より安全な社会の再建」、「Build Back Better」という言葉のもとでなされた、ナオミ・クラインが惨事便乗型資本主義として鋭く指摘したような開発に伴う搾取と破壊の問題が再び看過されるとしたら、問題は一層深刻だ（クライン, 2011）。このように考えると、仮に防災インフラが未だ十分でない社会の復興や防災においても「Build Back Better」は、やはり一度は問い返されるべき対象ではないだろうか。

災害復興の研究に、個別の復興の事例研究を超えた、社会構想論に結びつくような性質があるのだとしたら、それは「よりよい状態」とは何かを問おうとすることに尽きる。この問いが、災害復興の研究に普遍性をもたらすと同時に、個別の事例研究、個別の実践を豊かにもするはずだ。だから、「復興とは何か」という問いが原初的には何を問おうとしていたのかを常にふりかえっておくことは重要だ。では、そうした原点を忘れたかに見える、季節外れの「Build Back Better」のにわかなブームは、ただ的を外れただけの議論の退行なのだろうか。いやそうではない。「Build Back Better」が息を吹き返す背景には、これまでの時代における「よりよい状態」が容易に想定できない社会、つまりパラダイムロストにある社会が特徴的に抱えるある病理が作用している。

３．パラダイムロストの「効果」

パラダイムロストによる問題は、ただ身の丈に合わない旧来のパラダイムに基づいた復興がなされるだけではない。経営危機に陥った経営者が一発逆転を狙って大きな投資にうって出ることがある。あるいは、より身近なのは、帰りの電車賃も残らず最後のレースに賭けてしまうような、追い込まれたギャンブラーの存在だろう。これらの起死回生の試みが人々を惹きつける物語として消費されている回数に比べて、現実にそれが成功することはほとんどないことを私たちは経験的に知っている。何が言いたいのかというと、じり貧に追い込まれた人間は、盲目的な悪あがきによって、それがなければもう少し持ちこたえたはずの寿命を、かえって縮めてしまうことがあるということだ。これが冒頭に述べたパラダイムロストにおけるパラダイムが失われていること以上の「効果」だ。それは具体的には災害復興に次のような「効果」をもたらす。

災害復興において（これまでの社会のつつがない延長としての）積極的な未来を描けないとき、そのために十分な社会資源を確保できないとき、人々がそもそも被災地の現実を見なかったことにすること

がある。宮本（2019）は、これを「集合的否認」と名づけている。簡単にふりかえっておこう。近年しばしば被災から数年たってもあまり風景が変わらないような「復興しない被災地」や、とられるべき支援がなかなか行われない問題が増えてきた。そこでは、どうも被災という事実自体が「見なかったこと」にされているようなのである。とはいえ、被災という現実を前にして、それを「見なかったこと」にすることは容易ではない。そこで「集合的否認」を完成させるロジックとして用いられるのが「悪しき両論併記」だ。「両論併記」は、重要な事柄について、賛否が分かれるときは、そのそれぞれを紹介することで議論を深めようとする考え方のことで、これ自体は大切な考え方である。これに対して、「悪しき両論併記」とは、本来同じ土俵で比べてはいけないものを同じ次元で議論することで、問題を曖昧にしようとすることである。例えば、床下浸水の世帯への支援が重要だという意見に対して、高齢者へも配慮せよ（「高齢者世帯に床下浸水でも床板をはがせというのは酷」）、熱中症の問題もある（「この暑さの中で作業をする方が危ない」）、というように、それぞれは重要な問題なのだが、それを「床下浸水の世帯への支援」という議論と併記することで、「確かに高齢者もいるし」、「この暑さだし」という不安を喚起させ、結局のところ「床下浸水の世帯への支援も重要だけれどなかなか大変だ」という結論に着地させることで、問題を曖昧にし、具体的な活動が始まりにくい環境を作ってしまう。この「悪しき両論併記」は、一見、問題を「見ている」そぶりを見せているだけに質が悪い。なぜなら、「悪しき両論併記」のロジックを活用している人に、いくら「問題を見よ」と迫っても、「いやいや、見ているんですよ、ですがね」とクールに応じられてしまうからだ。この「悪しき両論併記」を経由して、「集合的否認」はより強力なものとして完成してしまう。

さらに、「悪しき両論併記」をサポートしているのは、現代社会に広く浸透した「相対主義」であることも付け加えておこう。ここでいう相対主義とは、価値の多様性を広く認めようという態度のことだ。ひとりひとりの意見が違うことを認める、それぞれの個性を尊重するという「相対主義」には、結局のところ「私は私」、「他人は他人」と人々を分断してしまう副作用がある。この「副作用」は、ひとりひとりの人々を人格を備えた自由な主体として解放しようとした「相対主義」の「主作用」を凌駕しかねない危険なものだ。念のために、述べておくと、私は価値の多様性が認められることに反対しているわけでは決してない。本当の意味で、個や価値の多様性が尊重されるためには、それぞれの「差異」に着目するだけでは十分ではないということ、それと同時に、それぞれ異なる存在がそれでもつながっているということを見るのも大切だろうということだ。これは、被災地NGO協動センターの村井雅清氏が、真宗大谷派の本山で出会った言葉として、しばしば引用する「バラバラで（なお）一緒」という言葉が表現しようとしていることと関連しているかもしれない（村井, 2019）。とにかく、重要なことは、「悪しき両論併記」をサポートしているのは、何も被災地を復興させまいという悪意ではなく、私たち現代社会が最も重要な前提条件のひとつとして尊重しようとしている考え方であり、だからこそ厄介なのだということだ。

ここで、「集合的否認のような問題があるのは分かるが、それはここまで論じられてきたような、帰りの電車賃も残らずかけてしまうようなこととは反対の現象ではないのか」という疑問を持たれる読者もいるかもしれない。確かに、これまで取り上げてきた集合的否認は、問題に対して支援があまりに「過少」であることの例であり、有り金すべてを叩くような「過剰」の対極に位置するようにも見える。しかし、実はこの両者は反対のようでいて同じものだ。まずは、ここまであまり紹介してこなかった、対処の「過少」ではなく「過剰」として現れる「集合的否認」を挙げておこう。

実は「過剰」の例は、「過少」に比べて、すでに知られたものが多い。例えば、東日本大震災の被災地のいくつかでみられる極端な「復興」があるだろう。今後の人口規模、あるいは災害前の人口規模で推し量っても、「過剰」と思われる巨大な箱物がいくつも建設されるような被災地が散見される。これらの復興によってもたらされた「レガシー」は、今後の被災地の肩に重くのしかかるだろう。もちろん、その背景には、震災の影響による意思決定プロセスの脆弱さ（震災により行政職員が命を失ったり、庁舎の破壊により行政機能が失われたこと）、意思決定プロセスの剥奪（被災地の判断を尊重しない国や研究者、外部支援者による関与）、一時的に大量に被災地に流入する外部者や外部資金による混乱など、

さまざまな要因が重なっていただろう。これらの被災地に、「不釣り合い」に見えるような復興の責任を押し付けてはならないし、むしろ被災地は復興過程においてもう一度被災したとみるべきなのかもしれない。いずれにせよ、この「過剰」な復興は、人口減少を迎えていく被災地の未来に深刻な影響を与える危険性がある。そしてこの「過剰」な復興は、未曽有の大災害によって決定的にダメージをうけた右肩上がりの時代のパラダイム（成長主義、科学万能主義、人間中心主義）の喪失を見なかったことにするために行われたとも言えるのではないか。この「過剰」な復興は、同じコインの裏表の存在として、「過剰」な防災を、南海トラフに備える「未災地」（この言葉も、ともすれば総体としての地域を「津波防災」という一面だけで切り取ることにつながるので、注意が必要だ）にももたらしている。また、同じ現象の中に、「過剰」と「過少」が同居しているような例もある。例えば、近年の集中豪雨の前後の報道はどうだろう。台風がやってくる前は、長時間にわたって気象に関わる報道をするのに対し、いざ被害が出ると、直後こそ報道量はあるものの、瞬く間に報道量は減っていく。この災害前までの「過剰」と災害後の「過剰」は、実証的に定量的に明らかにすべきなのだが、ここではまず読者の直感にそう遠くないだろうと思われる例として挙げておきたい。

このように、「集合的否認」は、パラダイムロストの効果として、つまり地続きの未来を積極的に見ようとしないことで起こる深刻な問題だ。「Build Back Better」のにわかなブームや素朴な受容も、「よりよい状態」を想定できない現状の否認の結果ではないか。「集合的否認」において、人々は問題を「見なかったこと」として否認し、その問題に対して「過少」であったり、「過剰」であったりする対応をする。いずれにせよ、両者は、社会資源が限られる中で未来の適正規模に合わせて、本当に大切なものを守りながら社会を少しずつ縮小していくような復興の対極にあり、いたずらに社会資源を浪費したり、いたずらに被災地を見捨てることで、社会全体の寿命を過度に縮めるという意味で大差ない。この「集合的否認」から分かるように、パラダイムを失った社会は、自ら首を絞めることで、加速度的に破綻していく危険性をもっている。だから、パラダイムシフトをはかる際には、このようなパラダイムロスト特有の問題を言語化し、盲目的な破滅を避けることが重要だ。その上で、では、どのようにすればもう一度、パラダイムを獲得することが出来るのだろうか。どこかに希望を見出さない限り、パラダイムロストによる悲劇は続くことになる。ここからは、パラダイムリゲインドの策略を考えてみよう。

４．パラダイムリゲインドにむけて

4.1 再びインストゥルメンタル／コンサマトリー

どのようにパラダイムを再獲得できるかというときに、理論的に重要なのは、パラダイムロストによる問題が、まずは未来の捉え方に起因して起こっているということ、より正確に言うと、時間についての態度、感覚に原因があるのだと理解することだ。パラダイムロストによる混乱は、積極的な未来を描けないことの結果だった。つまり、ここでは未来という時間に非常に特権的な地位が与えられており、現在の意味は、この未来の視点から価値づけられることになる。このような時間感覚が自明なものでないこと、それが近代化の過程で生み出されたものだということを明らかにしたのが真木悠介の「時間の比較社会学」だ（真木, 2003）。真木は、このような未来が現在の意味であるという時間感覚を、現在が未来にとっての手段になっているという意味で「インストゥルメンタル」（instrumental）な時間と名づけ、それに対し、現在の意味が現在のうちに充溢しているような時間を「コンサマトリー」（consummatory）な時間としている。インストゥルメンタルな時間は、ヘブライズムにおける終末論から生まれた「帰無してゆく不可逆性としての時間」と、銭貨に代表されるような物事を数量的に把握することを発達させたヘレニズムが生み出した「抽象的に無限化されてゆく時間」のブレンドによってつくられる。そして、真木はインストゥルメンタルな時間が支配的になった社会においてもなお、現在の生がそれ自体のうちに充足するような感覚、コンサマトリーな時間は可能なのだとしている。真木は、インストゥルメンタルな時間とコンサマトリーな時間は、互いに排他的なものではなくて、重層的に存在しているものとして扱っていることに留意が必要だ。

パラダイムロストが、社会を加速度的に破綻させるような「集合的否認」をもたらすのは、現在の社会の意味が過剰に未来へと疎外されているからであ

り、さらにその未来が現在のパラダイムにおいて破局的な価値しかもっていないからである。ならば、必要とされるのは、第一に現在の意味が過剰に未来の視点によって意味づけられることを避けるような、コンサマトリーな時間をどのように確保するのかということ、第二に、破局ではなく積極的に受容できるような未来像のよりどころとなるパラダイムを獲得することになるはずだ。そして、この両者は、コンサマトリーな時の充実を伴う実践がパラダイムを言語化することの源泉になったり、逆に、言語化されていくパラダイムが、そのパラダイムに基づくコンサマトリーな実践のヒントになるように、どちらが先かではなく互いに助けあいながら成立していくはずである。つまり、そのどちらから始めてもよいわけだが、ここではより実践的な関心をもとに、前者の方、どのようにすればコンサマトリーな時間を取り戻すことが出来るのかから考えたい。なぜなら、今や未来が破局的に感じられる感覚はあまりに強いものになっており、一足飛びにそうではない未来像を提示するだけでは、それを簡単に受容できるようには思えないからだ。そこで、ここでは下から、具体的な実践からパラダイムリゲインドに至る策略を考えてみたい。

4.2 コンサマトリーを回復するには

コンサマトリーな時の充実をいかに実現するのかについては、これまでたくさんの議論の蓄積がある。例えば、宮本（2016）は、真木悠介の議論を逆向きにたどることを試みた。つまり、インストゥルメンタルな時間感覚が何を疎外することによって成立してきたのかを見ることで、その疎外された対象を取り戻すことがコンサマトリーな時間の実現につながると考えたのである。真木悠介の議論においては、それは2点あり、ひとつは、ヘブライズムにおいて疎外された、人間に何らかの効用をもたらす対象としての「自然」ではなく、「〈あるがままに存在するもの〉のすべてとしての〈自然〉」（真木, 2003: p.193）であり、もうひとつはヘレニズムにおいて疎外された、「等価のないもの」（同, p.306）、つまりかけがえのない存在としての〈他者〉であった。だから、未来が現在にとっての意味であるというインストゥルメンタルな時間が支配的な社会においてもなお、人間と自然が不可分であるような感覚だったり、他者とのかけがえのない関係の感覚をもつことができれば、コンサマトリーな時の充実は得られるということだ。宮本（2016）では、この2つの感覚を得られるようなかかわりが実践的には有効だとし、それを宮本（2015）で議論した、めざすかかわりとすごすかかわりのうちの、後者の理論的な含意とした。

このようなインストゥルメンタルとコンサマトリーの併存について、矢守（2018）は、両者が逆説的ともいうべきダイナミズムをもっているという重要な指摘をしている。それは、一方を徹底的に突き詰めることが、もう一方の徹底につながるということだ。具体的な例として、ある地域で徹底的な津波防災を実現しようとすると（インストゥルメンタル）、その地域の人々の平均像ではなく、具体的な個人の全体、その人の暮らしの全容に向き合わなければ、この人を救うことなどできなくなる。つまり、中途半端なインストゥルメンタルな感覚は現在を疎外するが、徹底的なインストゥルメンタルな感覚は現在を疎外することなく、かえってコンサマトリーな時の充実をもたらすということだ。

さらに、矢守（2019）は、この議論の補論として、インストゥルメンタルとコンサマトリーの機能連関が、上記のようなインストゥルメンタルの拡大・膨張の徹底によって、現在を高揚化・絶対化させてコンサマトリーへと転回させるだけでなく、それとは全く逆に、インストゥルメンタルの縮小・退縮の徹底によって、現在を冷却化・静謐化し、それをコンサマトリーへと転回させる方策もあるのだと指摘し、それが鷲田（2006）による〈待つ〉ことの根底にあるのではないかという考察をしている。そして、宮本（2015）のめざすかかわりとすごすかかわりの関係も、このような両者の静かに沈潜した関係として捉えなおすことが、明確な概念づけと創造的な実践が可能になるのではないかと指摘している。確かに、めざすかかわりが当事者がすでに抱えている無力感を強めてしまうことでとん挫する際には、一度、めざすかかわりから距離を置いて、変わらなくてよいを前提としたすごすかかわりを行うのがよいという主張は、論理的に捉えなおせば、矢守の指摘のようにインストゥルメンタルの縮小・退縮によって、何かしらの未来の価値観から自分を価値づける見方を冷却化・静謐化し、現在のうちに充足する自分の価値を実感するコンサマトリーな時の充実を実現していると言えるだろう。そして、このような機能連関を、鷲田（2006）は「開け」に見出す。「開け」とは、思い切って単純化すると、未来に何が待ってい

るのか、その一切の予断を排したうえで、その未来について自らを〈開いて〉待つことである。ここでは、未来は存在しないわけではないが（待っているのだから）、現在を拘束し、むなしくするわけでもない（現在の時点からの期待の一切を排しているのだから、それにより現在が価値づけられることもまたない）。この「開け」を伴う〈待つ〉こそが、インストゥルメンタルによる閉塞から抜け出す鍵であり、そこでは人々は「時を細かく刻んで」静かに生きながら何かを待つのだと、矢守（2019）は鷲田（2006）のエッセンスを引き出している。

この一連の透徹したロジックは、インストゥルメンタルとコンサマトリーの機能連関の整理として完成の域にあり、私もこのように位置づけるのが理論的には明快だと考える。ただし、このロジックを実践的なものとして広げていく際のトーンには、もう少し多様な可能性があるように思う。というのも、インストルメンタルの徹底的な拡大にせよ、徹底的な縮小にせよ、「開け」を伴う〈待つ〉にせよ、それらは見方によれば、何か特別な境地、特別な実践でないと、たどり着けないような印象がないだろうか。一度、インストゥルメンタルな時間感覚を知った人間がその呪縛から逃れることは困難だろう。何か特別な悟りの境地に至った一部の人間でないと、インストゥルメンタルとコンサマトリーを併存させることが出来ないと感じられてしまっては、あの集合的否認がやはり多くの人間に甘い罠となって忍び寄り、結果として社会全体は、少数の「悟りに至った」人間を含めて破滅してしまうのではないか。

もちろん、これらの主張が意味していることには、実践的にはありふれた誰にでも実現できることも含まれているはずなのだが（事実、そう指摘されてもいるのだが）、それをもっと明示的に議論してみることも可能ではないか。そこで、同じ〈待つ〉ことに着目することで、鷲田（2006）が積極的には触れることのなかった、〈待つ〉ことがもつもうひとつの側面から、〈待つ〉ことの可能性をあらためて引き出してみたい。鷲田（2006）については、矢守（2019）においても詳細に紹介されているのだが、矢守は鷲田の論考を、木村敏の論考に従って、ポストフェストゥムとアンテフェストゥムの2系統からあらためて整理し直しているので、ここではまず鷲田の論考の全体の傾向が分かるように振り返った上で、〈待つ〉ことがもつもうひとつの可能性を考えたい。

4.3 〈待つ〉こと再考

鷲田（2006）の論考は、「開け」を含めて、「焦れ」、「予期」、「自壊」、「冷却」といったキーワードによって名づけられた19の章によって、〈待つ〉ことのさまざまな側面が論じられている。鷲田は、まえがきの一文目を「待たなくてよい社会になった」（同, p.7）から始めている。そして、二文目を「待つことが出来ない社会になった」と続けている（同）。待たなくてよい社会とは、だれもが携帯電話を持ち歩いて、待ち合わせにちょっと遅れようものなら一言連絡しておけば、相手はその間、別のことに時間を費やすことができる、そんな社会のことである。そして、「待たなくてよい社会」は、次第に人々が前のめりになって、そもそも「待つことが出来ない社会」になる。例えば、現代の企業活動で用いられている言葉には、「プロジェクト」、「プロフィット」、「プロダクション」、「プロモーション」というように、「プロ」という接頭辞（「前に」「先に」「あらかじめ」という意味を持っている）がついていることを挙げて、ここには「先に設定した目標の方から現在なすべきことを規定する」（同, p.18）態度がみられる。本来、「待つことには、偶然の（想定外の）働きに期待することが含まれている」（同）のだから、それをあらかじめ囲いこんでおこうとすることには、〈待つ〉ことの破綻がある。

ここから、鷲田の論考は、〈待つ〉ことの困難さや、自壊・自滅、〈待つ〉ことをめぐる繊細な緊張関係や苦しさに目を向けていく。そして、〈待つ〉ことの困難から抜け出すには、一度〈待つ〉ことをやめること、「待つことにまつわるすべてを消去すること、気を余所へやること」（同, p.85）とまで、述べていく。そして、「待つことが待つことである保証がないまま、あてどもなく、ただひたすら待つ」（同, p.151）ことを表した戯曲として、サミュエル・ベケットの戯曲、「ゴドーを待ちながら」の分析によって、議論を締めくくる。ここでは、神（god）を揶揄的に表すとされる「ゴドー」の到来をめぐる著名な戯曲を例にすることで、〈待つ〉ことの困難がひとりひとりに経験されているものであると同時に、神なき現代社会に通底する困難であることが暗に示されている。

「ゴドー」を待つエストラゴンとウラジミールは、ひたすらナンセンスなやりとりを続けながら、ゴド

ーを待っているふりをして、時間つぶしをしている。なぜ、彼らは待つふりをしているのか。それは、「未来にあるなんらかの目的に向けてのプロセスとして位置づける以外に、現在の行為を意味づける算段はありえないのかという問題」（同, p.182）と、「そもそもそのつどの行為に意味を求めることじたいを放棄するような生き方はあり得ないのかという問題」（同, p.182-183）に、ふたりは答えを持ちあわせていないからだ。つまり、ここでふたりは、まさにインストゥルメンタルな時間感覚の中で現在の意味が未来へと疎外されている。だから、鷲田は、このふたりは、「待つことをしていない」（同, p.184）、「彼らにおいて、待つことは待つふりをすることと区別がつかない」（同, p.185）のだという。そこには未来への一抹の期待が未だ残存しているからだ。ここから鷲田の議論は、先に紹介した「開け」として結論づけられていく。待つことを放棄することが待つことにつながるのだと。未知の未来に自らを「開いておく」ことが、〈待つ〉ことを成就させるのだと。

このようにあらためてふりかえってみると、鷲田（2006）は、どちらかというと、〈待つ〉ことを非常に困難で、苦しく、難しいものだと捉えていること、〈待つ〉ことの簡単には成就しない側面を突き詰めることで、〈待つ〉ことの本質や可能性を引き出そうとしていることがわかる。しかし、逆の可能性もあるのではないか。この本の中で、鷲田は〈待つ〉ことが持っているもうひとつの側面には、積極的に触れられていないように思われる。それは、端的に言えば、成就する〈待つ〉である。それは、誰しもが日常的に経験する、凡庸で、ありふれた、「繰り返し訪れて、ささやかに成就する」〈待つ〉である。

4.4 つなぐかかわり

2018年の西日本豪雨で被災した広島県坂町の仮設住宅を訪問したときのことだ。坂町には災害直後から、私が所属する兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の大学院生が継続的に現地で支援を続けていて、仮設住宅を訪問したのも、熱心に現地に通っている院生に案内してもらってのことだった。そこで、仮設住宅に入居しているある女性が、われわれを見て、「今日は巧くんは来ているの？巧くんは今度はいつ来るの？」とたずねられた。巧くんとは、当時大学院の修士2年だった久後巧さんのことだ。このありふれた言葉に、はっとさせられ、気づかされるものがあった。

被災者には生活再建にあたって、さまざまなフェーズ、段階がある。避難所が開設されるか、プライバシーがそこで確保されるか、家屋の解体が終わるか、自治体としてあるいはコミュニティとしての住宅再建の方針が決まるか、公営住宅が建設されるか、というように。これらのフェーズは、短時間で達成されるものもあれば、数年かかるものもある。その間、被災者は不安を抱えながら、じっと待たなければならない。さらに、すべての生活再建が無事に終わったとして、その先の暮らしがどのようなものになるのかという不安は消えることはない。どのような避難所を開設するのがよいか、家屋解体はどうあるべきか、住宅再建はどうあるべきかといった、それぞれのフェーズに係る問題自体を扱う研究者は多いし、支援者も多い。ところが、そのフェーズとフェーズの間の時間をつなぐようなかかわりというのは、案外そう多いものではない。そこでは具体的な問題が見えにくいし、支援の「成果」も見えにくいからだ。しかし、被災者にとっては、このフェーズとフェーズの間の時間を、希望を失わずに待つことが出来なければ、よりよい生活再建を実現することが出来ない。この、フェーズとフェーズの間の時間を支えるかかわり、被災者の少し先の未来と現在をつなぐようなかかわりを、ここでは「つなぐ」かかわりと名づけたい。これは、理論的には、被災者の現在の存在を肯定するという意味では、コンサマトリーな時の充実としてのすごすかかわりと変わりないのだが、そのひとつひとつのすごすかかわりを「つないでいく」ものとして、あらためて位置づけてみたいのだ。

「巧くんは今度はいつ来るの」という問いかけには、まさにそこに「つなぐ」かかわりがあるのだと考える。この仮設住宅に入居する女性は、きっと巧くんが来月またやってくるということをひとつの糧としてこの1か月を過ごすことが出来る。そしてまた再来月も、その次の月もというように。大学院生たちは現地に通いながら、避難所の環境改善や公営住宅の入居にあたっての勉強会など、それぞれのフェーズの課題自体を支援することも行ってきた。それが実現できたのは、この「つなぐ」かかわりによって、坂町の被災者が何とか希望を失わずに待つことが出来るように支えようとしてきたからではないか。

特に何か具体的な目的があったり、改善すべき問題を想定していなかったとしても、定期的に被災地に通い続けることに意味があるのは、この「つなぐ」かかわりの意義によるものだ。そして、すごすかかわりが双方向的なものであったように、この「つなぐ」かかわりは、久後巧さんにとっても、そのひと月ひと月を満ち足りたあたたかいものにしているはずだ。

そして、この「つなぐ」かかわりは、なにも被災地にだけ該当するものではない。さまざまなフェーズを経ながら積極的に描くことが出来ない未来に向かって生きていくということは、パラダイムロストの時代にいかに生きていくかという問題と同じことである。そこに、どのように点と点としてのコンサマトリーな時の充実を見出し、「つなぐ」ことができるのかが、先の被災地の実践と同様のことが大切なのだと考えてみることが出来る。例えば、昨今議論されている消滅していく集落の看取りについてはどうだろう。そもそも「看取り」とは何か。「最後を看取る」のだから、その死、最後の瞬間に立ち会うことを、さしあたって意味しているようには見える。しかし、ここには孤独死が、ひとりで死ぬことに問題があるのではなく、一人で死んでも気づかれないぐらい生きていた時に孤独だったのだという、阪神・淡路大震災の被災地における「転回」と同様のものが必要だろう。孤独死を防ごうという取り組みが、ときに生存確認としての見守りに陥ってしまうのと同様に、集落の看取りも、その最後の瞬間にだけ関心が向けられるとしたら、消滅した集落リストの一覧に終わってしまうかもしれない。そうではないのだとしたら、孤独死は孤独な生が問題なのだとして、神戸のボランティアたちが被災者と日常の中で交流しようとしたのと同じように、集落の看取りとは、その集落が最期を迎えるまでの時間をともに過ごすことではないか。つまり、その消滅を食い止めようとするわけでもなく、「活性化」しようとするわけでもない、消滅の前にある地域にただ通い続けるということだけでもかけがえのない価値がそこにあるということである。ここで、「つなぐ」かかわりに内在する価値を念頭に置くことで、「ただ現地に通っているだけで、地域の人口はそれでも減ってしまうし、自分のかかわりには何の意味もないのではないか、自分は無力ではないか」と過度に悩まずに済むかもしれない。すべての存在はいつか終わりを迎える。しかし、その終わりの迎え方に、その人らしさ、その集落らしさ、人間らしさが存在するのかは、終わりの迎え方次第なのだから。

蛇足ながら、この「つなぐ」かかわりを、先の真木（2003）の論考に関連づけなおすと、真木が原始共同体の時間として紹介する2つの点と点の間を行ったり来たりするような反復的な時間（「昼／夜」、「聖／俗」、「ハレ／ケ」）にあたるだろう。このような時間感覚は、未来が現在の意味であるインストゥルメンタルな時間感覚が支配的となった現代でも、生活の中に残存するものである。だから、「つなぐ」かかわりによって、このような反復を積極的にもたらすような、「繰り返し訪れて、ささやかに成就する」〈待つ〉を実現するような取り組みもまた、インストゥルメンタルな時間による閉塞から現在の価値を解放することになるだろう。

５．おわりに

この「繰り返し訪れて、ささやかに成就する」〈待つ〉によって、少し先の未来と現在を「つなぐ」かかわりは、矢守（2018, 2019）の述べる、インストゥルメンタルとコンサマトリーの機能連関が確かに存在することをあらためて示すものである。少し先の未来（インストゥルメンタル）を回復することで、現在の生（コンサマトリー）を豊かにするのだから。さらに、本稿で克服をめざした「集合的否認」も、この機能連関を裏側から証明している。パラダイムロストによって積極的な未来を失うことで、問題に対して過剰か、あるいは過少にしか対処できなくなるのは、正常なインストゥルメンタルの失調である。このインストゥルメンタルの失調が、復興しない被災地の中で不安を抱えて生きるようなコンサマトリーの欠如をもたらしている。

「金もうけのために生まれたんじゃない」、自分の人生はもっと大切なことにささげたい、というような思いは、多かれ少なかれ青年期の人間が一度は抱くものではないだろうか。確かに、金もうけよりもっと大切なものがある。けれど、この純粋な青年はやがて、「金もうけよりも大切なことを守るには多少の金もうけも必要である」という矛盾に直面し、その折り合いをつけていくことになる。「花より団子」ではないが、「花」を愛でるには「団子」もあった方がいいのだと。この折り合いに失敗すると、つまり、金もうけよりも大切なことという目的のた

めの手段に過ぎなかった金もうけがいつの間にか目的化してしまうと、ただの薄っぺらい金もうけ人間になってしまうのだ。

「つなぐ」かかわりにおけるインストゥルメンタルとコンサマトリーの機能連関は、論理的には、矢守（2019）の述べる、インストゥルメンタルの縮小・退縮の徹底によって、現在を冷却化・静謐化し、それをコンサマトリーへと転回させるという方策や、鷲田（2006）の「開け」と変わるものではない。ただ、本稿ではこの機能連関が、もっと凡庸で、ありふれた形で、誰にでも実現できるようなものでもありうることをあらためて強調してきた。それが「つなぐ」かかわりだ。この「つなぐ」かかわりのような実践を含めて、過剰なインストゥルメンタルからコンサマトリーを救い出す試みを積み重ねることが、それが拠り所にするような価値とはどのようなものなのかというそれぞれの思考を助け、やがてパラダイムリゲインドにつながっていくのではないかというのが本論の結論である。

と、ここまで書いてきたうえで、それでもこの結論は、抽象的に過ぎて、ハードルが高いと感じられてしまっては元も子もないので、もっと実践的にすぐにでもできるようなアイデアをいくつか紹介して、本論を終えたい。というのも、ひとまず右肩上がりを前提としないことで実践的に工夫できることもいくらでもあるように思われるからだ。まず、右肩上がりの時代のパラダイムを前提としている言葉を徹底的に洗い出してみるのも有意義だ。例えば、「交流人口」というと聞こえはいいが、それでは依然地域の活気を何らかの人間の数（結局のところ人口）で測ろうとしているのに変わりはないではないか、ならば、それに代わるアイデアはないか、方策はないか、というように。あるいは、「世代交代」という言葉も、右肩上がりの時代のパラダイムにもとづいたものだろう。これも、後続する世代が、先の世代と同様につつがなく出現していくことを前提としているのだから。実際、地方コミュニティの中には、世代交代で役割を任された「若手」世代が、次にバトンを渡す相手がいないことで、過度に負担が集中して苦しんでいる例もある（宮本・草郷, 2020）。ならば、右肩下がりの時代は、「世代交代」ではなく「世代再編」が必要ではないか。将来ある若手世代を中心に据えながらも、先行世代も何らかの役割を担うことによって補完する。あるいは、これまでそこに関わらなかったような、コミュニティの外部の人間が参入してくることも大切かもしれない。こうした世代間、コミュニティ間の協働が重要になるはずだ。

このような視点に立てば、いわゆる「生活と安全」の弁証法、いち早い生活再建が先か、より安全なまちの再建が優先されるべきかという古典的な問いの見方も変わってくるのではないか。つまり、この二項対立が問題となるのは、それぞれの世帯がこれからの未来もつつがなく存在するという、世帯の連続性が前提となっているからだ。これも、右肩上がりの時代のパラダイムに基づくものだろう。ならば、世帯の連続性が前提としないのならどうか。例えば、同じ世帯の中でも、高齢者世帯は元の居住地での生活を一代限りの居住権として認めるが、若年世帯の再建はより安全な選択肢を模索するといった工夫も可能となる[1]。このように、世帯の連続性を前提としないのであれば、柔軟な復興が可能になるし、実際に丹波市の水害からの復興ではそれに近いことを長期的な視野の中で実現しようとしている（丹波市, 2020）。

このように、パラダイムロストの克服については、理論的に、思想的に、どのように乗りこえられるのかを考えるのと同時に、それが精神論だけに陥るのを避け、具体的な実践としてどのようなものが可能なのか、それをできるだけすそ野の広いものとして考えてみることが大切であると考える。その上で積み重ねられる実践が、パラダイムリゲインドをもたらすだろう。

補注

(1)兵庫県立大学の澤田雅浩氏のアイデアによる。

参考文献

稲垣文彦（2016）被災地復興における住民の主体性獲得プロセスに関する研究 長岡技術科学大学博士論文

ナオミ・クライン（2011） ショック・ドクトリン〈上・下〉－惨事便乗型資本主義の正体を暴く（幾島幸子・村上由見子訳） 岩波書店

真木悠介（2003）時間の比較社会学 岩波書店

宮本匠（2015）災害復興における“めざす”かかわりと “すごす”かかわり：東日本大震災の復興曲線インタビューから 質的心理学研究, 14, 6-18.

宮本匠（2016）現代社会のアクションリサーチにおける時

間論的態度の問題 実験社会心理学研究，56，60-69.
宮本匠（2019）人口減少社会の災害復興の課題：集合的否認と両論併記 災害と共生, 3, 11-24.
近藤誠司・宮本匠・石原凌河・木戸崇之・李勇昕・宮前良平・大門大朗・立部知保里（2020）災害復興をめぐることばの諸相―復興ワードマップ研究会による基礎的考察― 復興, 23, 35-45.
宮本匠・草郷孝好（2020）中山間地域の復興過程における住民主体性と地域社会の変容－新潟県中越地震から15年を前に－ 自然災害科学，38, 469-485.
村井雅清（2019）検証寺子屋12月18日を前に（第６回メッセージ） 被災地NGO協動センターfacebook 〈https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO/posts/2793364967349988/〉 (2020年3月17日アクセス)
内閣府（2015）平成27年度防災白書
丹波市 (2020) 平成26年8月丹波市豪雨災害復興記録誌
鷲田清一（2006）「待つ」ということ 角川選書
矢守克也（2018）アクションリサーチ・イン・アクション：共同当事者・時間・データ 新曜社
矢守克也（2019）〈待つ〉時間－補論：アクションリサーチの〈時間〉－ 災害と共生, 2(2), 1-8.
矢守克也（2020）災害復興のパラダイムシフト 日本災害復興学会論文集, 15, 37-43.